
プレイヤー

朱紋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
プレイヤー

【Nコード】
N6860Q

【作者名】
朱紋

【あらすじ】
この世界に生きる、様々な生物。この世界を作る、様々な土地。その中で生きる、一つの種、人間。そして人間の中でも、直接的にこの世界に歯向かう者。彼らを総称して、人々は「プレイヤー」と呼んでいた。これはその中でも、並みの腕と並みの経験を持つ者たちの、今から始まる物語である。

1・悪臭と戦闘のプロローグ(前書き)

この物語はゲーム「モンスターハンター」シリーズに影響を受け、書かせてもらっています。

酷似した設定、キャラクターが出る場合がありますが、ご了承ください。

温かい目で見て下さると、助かります。

1・悪臭と戦闘のプロローグ

「……ったく。いつまでこんな臭え場所にいなきゃなんねえんだよ」

「知りませんよ。ターゲットが戻ってくるまでの辛抱です」

「そうかよ。……で、お前はいつまで吐いてんだ」

「げふっ！……いや、だつてここ……おろろろろろろ！！」

青年は頭を抱え、しかめ面を浮かべる。

赤い鱗でできた服を身に纏い、両手の肘から手の甲までを、赤と言つより紅色の、よくなめされた、しなやかな皮で覆っている

それと同じ材料で作られた帯を、額と腹部に巻いていた。

腰の前で結んだ赤い毛皮のマントには、黒い鞘の刀がささっている。

いつでも振り抜けるよう、青年はその黒く澄んだ石が埋め込まれた柄に手を添えていた。

そして青年の指が少し動いたとき、龍を模した指輪がカチャカチャと音をたてていた。

隣には、声が少し幼いもう一人の少年。

全身を白零石と呼ばれる石を加工して作られた楔帷子で覆っている。

その上から、真っ白な服やズボンなどで、これまた全身を覆っていた。

そして、白零石でできた盾と、銀色の細い槍を背負っていた。

その二人の後方に一人。

刺激臭にやられ吐いている、涙目の少女。

緑色と黒色の色彩が特徴的な、とげとげした鎧を纏っている。

余談ではあるが、一時期は「スイカ」と呼ばれたこの装備、今ではその性能が認められ嘲笑されることも少なくなった。

そして腰には左右、二つの黒い牙のようなものが付いたグローブ

を付けていた。

「・・・いや、お前が吐く理由も大いに分かる。分かるんだが・・・」

青年は少女に何か言いたげに口を開く。

「俺たちモ我慢シテルンダカラ、ソナニ潔ク出スンジャーネーヨ」

「そう、それだ！その通りだ！！」

少年の感情のこもってない助け舟に、青年は大きく頷いた。

「いや、無理、出るわ、これ」

少女は右手をちよいちよいつと振る。

「だからそれを我慢しろって言っただよ！！」

「だからそれが我慢できないって言っただよ！！」

「マー、マー、二人トモ」

「おろろろろろ！！！！」

「だああ！うるせえ！！ウルセエ！！！！五月蠅え！！！！」

三人がいるのは、国に指定された狩猟区。

その中でもユグドラシルと呼ばれる、危険度5の陸系区だ。

その場所がユグドラシルと言われるのは、狩場自体が木の中だからである。

正確には、木があつたであろう場所だからだ。

この狩場は、中心から半径2〜3キロの場所に大きな壁のようなものがある。

狩場を囲んでいるそれは、いわば木の表皮なのだ。

つまり、ユグドラシルと呼ばれるこの狩場は、もともと巨大な木であつたものが朽ち、そのくり抜かれたような内部で独自の生態系が成された場所なのである。

故にこの場所は、もともとあつたであろう巨木から、ユグドラシルと名づけられた。

そして三人のハンターは、その中で今、一つのミッションを実行していた。

そのミッション内容は「世界樹の影の狩猟」。

世界樹の影、とは、このユグドラシルという狩場の、二種の頂点のうちの片側。

天の主と地の主、の地の方だ。

「ああ・・・マジでいい加減にして欲しいな、この臭い」

「ホント、そう思いますよ。消臭草が無かったら死んでます、これ」

「つつても今は食ってないだろ。後一本ずつしか無えし、いつ戻ってくるかも分からねえ」

消臭草。その名の通り、いかなる臭いも半減させてくれる便利な草だ。

三人が滅入っているのは、立ち込めたこの死臭だった。

しかしこれは、木の内部が腐食している為ではない。

むしろ中は、あらゆる植物が生息し、外界より酸素濃度が濃く、空気も澄んでいる。

ただ一つ、「影の通り道」と呼ばれる場所を除いては。

「ふう・・・なんかもう出し切ったって感じ」

「出しきんなよ・・・」

少女が二人の間を割って入った。

「で、状況は？」

「見ての通り、だ」

光が薄く差し込む、三人がいるその場所は、その「影の通り道」と呼ばれる場所の中で、最も暗く、最も臭い場所だった。

そう。ここはその「影」の棲家だ。

地面には大小様々な死体が転がっていた。

そしてその多くは腐乱して、原型を留めていないものが大半だった。

その中に、工房で見覚えのある武器や防具も転がっていた。きつと自分達の前に、「影」を狩りに来たハンターだろう。

結果は考えずとも分かる。

「お前ら、最後まで気を抜くなよ」

「・・・僕だってもう一人前ですよ。分かっています」

「そだよ。それにしても、遅いね」

「ああ、かれこれもう・・・」

その瞬間、三人の息が止まった。

先ほどよりも、何倍も死臭が強まったのだ。

三人は素早く腰の袋から消臭草を取り出し、口へと運んだ。

茎がポキッと折れ、中から液が溢れ出る。

臭いが薄まったことにより、三人はより警戒に専念することになった。

ぬちゃっ・・・

三人の聴覚、そして視覚は、全て一点に集中した。

腐乱死体の広がった地面。その中心。

そこがほんの少し盛り上がったのだ。

「・・・来る」

少女が呟いた。その瞬間・・・

びちゃびちゃびちゃびちゃびちゃびちゃびちゃびちゃびちゃびちゃ・・・！！！！！！

あたりに死肉をばら撒いて、巨大な竜が現れた。

体に塗れた死体から垣間見える表皮は、黒に近い紫色。

翼は骨組みに皮がまとわり付いたただけのようで、機能をまるで果

たせそうに無い。

四肢は太く、体は全体的に皮が余って垂れている。

尻尾の上部は骨組みが浮き出しゴツゴツしていて、先端には白い

毛が生えていた。

顔は眉間に皮が集まり、目の上に二つ、顔の流れに従い後ろ向き

に角が伸びていた。

真っ赤な目があたりを映す。

目は暗闇に対し進化していたが、隠れている三人を見つけることはできなかつた。

この竜こそが、今回の三人のターゲット。

名を、屍竜・ニドヘグ。

動物を食らい、植物を食らい、死体を食らい、その残骸に囲まれ

一生を終える。

その生懸、そして姿から、神話の怪物の名をそのまま付けられた竜だ。

ニドヘグはあたりを伺っていたが、しばらくすると体を丸めた。よく見ると体中が傷だらけだ。

そう、三人はニドヘグに、休まなければならないほどのダメージを与えていたのだ。

そしてニドヘグの寝息を合図に、青年は小さな声で言った。

「俺が回りこんで尻尾をぶった切る。あいつは起きて俺に顔を向けようとするだろう」

青年は地面に転がっている石をニドヘグに例え、作戦を言う。

「この茂みがあいつの視界から外れた瞬間に飛び出せ」

「分かりました」

「オーケー」

二人の返事を聞いた後、青年は静かにこのエリアを抜けた。

そしてエリアの反対側の入り口に現れた。

「・・・よし」

身をかがめ、剣の柄に手を添え、青年は音を立てることなど気にせず走った。

ダダダダダダダダダダダダダダ！！！！

ニドヘグはその音で目を覚ます。

しかしその時にはもう、ニドヘグの尻尾は青年の間合いに入っていた。

「らあああああ！！！！」

青年は勢いよく刀を振り抜く。

シュシュツ！！

一回、二回と切り裂く。尻尾の周りの肉が削げ、骨がむき出しになった。

その激痛でニドヘグは寝起きにも関わらず、すぐに立ち上がった。そして尻尾の方向に振り向く。

ニドヘグは切られたことにすら気付いてないかのように、まだ虚しく叫んでいた。

「・・・虚しいな」

落ち着いた声で青年は言う。

そして上段に構えた刀を、一瞬でニドヘグの眉間に突き刺した。

その瞬間、ニドヘグの動きがピタツと止まった。

それと共に、大気も音も、全てが無になったような錯覚が生まれる。

額から溢れる血は、まるで彼岸花のようだった。

この場所の主の流れが、今、絶えたのだ。

「終わった・・・ね」

少女がそう言って、少年も軽く頷く。

青年は、刀を最後まで差し込んだ。

より多く噴き出した血は、勢いが衰えていき、やがて止まった。

鮮やかに刀を抜き、袋から布を取り出し血を拭き取る。

そして綺麗に光る刀身を、黒い鞘に収めた。

「・・・うし。少し頂戴するか」

「そうですね」

「ほーい」

少年が小さな爆弾のようなものを、天井の開けた場所に置いた。

青年が腰からナイフを取り出し、皮や骨を剥ぎ取り始める。

少女と少年もそれに続き、剥ぎ取り始めた。

すると爆弾のようなものが音を立て弾け飛ぶ。

そして、狩りの終わりを、彼らの勝利を告げる、赤い煙の柱を立てた。

2・帰還して尚騒がしい者

昔、ひどく荒れた地があった。

生命などまるでいない、虚しいその地に一つのキャラバンが訪れる。

そして彼らは、その地を肥やし、水脈を掘り当て、家を建て、村を作った。

近くの荒れた鉱山から鉱石を掘り起こし、様々な施設を作った。

そこへ、ある時は旅人が、ある時は難民が訪れ、その地に住みついた。

あたりに無数の種をまき、それは広大な森となった。

あたりに何十年も水を流し、それは海に繋がるほどの川となった。

その村は多くの歳月を経て、立派な街へと変わった。

そしてその街は、キャラバンの名を引き継いだ。

偉大なる大地。そこに芽吹く命への尊重と敬愛の証。

太陽の旗を掲げる街の名は、「アースガルド」。

伝統的な石造り街並みが、やはり懐かしい。

狩場とは違う意味で、気持ちが高揚する。

この街並みを抜けた場所にある大広場。

中心には大きな噴水があり、天辺に太陽のオブジェが飾られてある。

そして、その広場を囲う様々な店。

その中でも古い木造の施設が、彼らの戻るべき場所だった。

「あー・・・長えよ、帰り道・・・」

「あっ、レイ君！ミーちゃんにリーヴ君も！！お帰り！！」

だるそうに店のドアをくぐる青年、オーレイ・ランフィールド（

愛称 レイ)を、明るい声で歓迎したのは、この猟団の下働きの少女、リサ・ハーメルン(愛称 リサ)だった。

「おお、リサ。ただいま」

「ただいま、リサちゃん」

「いえ〜い!!!リサちゃんただいま〜!!!」

少年、リーヴァン・ヨーク(愛称 リーヴ)は軽く会釈をし、少女ミツフィ・レオニール(愛称 ミーetc...)は両手を突き出し、リサにハイタッチをせがんだ。

それに何のためらいも無く応じるリサの脇を通り、レイはカウンターのベルを鳴らした。

「あら、お帰りレイ君」

その音で気付いた訳ではないだろうが、カウンターの奥から長い髪に髪飾りをいくつも付けた、二十歳前後の女性、シエリー(本名不明)が現れた。

「ああ。例の屍竜のミッション、終わったから」

「流石ね。お疲れ様」

そう言っただけでシエリーはカウンターの下から紙の束を取り出し、その中の一枚をちぎった。

そしてその紙の下の四角い枠に、懐から取り出した口紅でチェックを書いた。

「はい、依頼書」

「ありがとうございます」

レイはそれを受け取り、下の死亡者枠に「無」と書いた。

レイたちはこの猟団に所属して、依頼されたことを実行する「プレイヤー」と呼ばれる仕事をしている。

仕事は主に未開地の探索やモンスターの狩り、危険区での材料調達などだ。

それらの依頼は国や街が、猟団に直接依頼する。

そしてその依頼を成功させた「プレイヤー」は、相応の金と素材が与えられるのだ。

さらに依頼を成功させればさせるほどポイントは溜まり、その量でレベルが決まる。

そしてそのレベルが高ければ高いほど、受けられる依頼も多くなるのだ。

依頼の報酬は、まず狩りを成功させたことを国や街の兵が確認。

その後このように猟団で依頼書にチェックをもらい、その紙を街の役所に持っていく。

そしてその依頼が終了済みか、そしてそれを終えた「プレイヤー」の名を兵からの報告と照らし合わせ、問題がなければ報酬金と報酬素材は猟団に届けられる。

と、いった感じだ。

そして依頼書の死亡者枠というのは、その名のとおり死亡者の有無を書く場所だ。

ちなみにレイは、ここには一度も「有」と書いたことはない。

ミッションが終わり、この紙を見るたびにレイはほっとするのであった。

「レイ、ちょっと役所に調べものありますから、それは僕が届けておきますよ」

「そうか、ありがてえ」

「あら、それじゃあ私も頼もつかしら。新しい依頼書の調達」

「分かりました」

レイは紙をリーヴに渡す。

それをリーヴはポーチに入れて、ミツフィたちを避けてドアに向かった。

「いってきますね」

「おお、頼んだ」

「いってらっしゃーい!!!」

リーヴは軽く手を振り外に出た。

レイはカウンター近くの大きな丸いテーブルに腰掛けた。それに続きミツフィとリサもそれぞれレイの両脇に座った。

四人用のテーブルなので正面にシェリーも座るかと思ったが、カウターの椅子を持ってきてレイとリサの間に座った。

「うっ・・・シェリーさんのその匂い、やっぱり慣れねえ・・・」

「ふふ・・・こちら辺には無いからねえ。東の島国の「お香」というものらしいわ」

「へー、そんなのどこで手に入るんですかー？」

「さあ、どこでしょう？」

長い裾を口元にあて、不適に笑うシェリー。

確かこの服も、その島国の「着物」というものだと言っていた。

四人はリーヴが返ってくるまでの時間潰しに雑談を始めた。

「それにしてもあの竜！えーと・・・ニドヘグ、だっけ？ホント臭かったー！！」

「確かにな・・・消臭草の風呂に入っても残ってたもんな」

その言葉に、リサは驚く。

「え〜！？じゃあどうやって臭いを取ったんですか？」

「消臭草のお風呂でも取れないなら・・・パケルマの羽かしら？」

「ああ。まあ国が負担してくれたんだけどな」

「パケルマ？」

聞き慣れないその言葉に、リサは首を捻る。

「うん。清鳥って呼ばれてる、遠い北の森にいる鳥だよ」

「本当に綺麗な場所にしか住まなくて、その鳥自体もすげえ清潔なんだ」

「そしてパケルマの羽を燃やして出る煙は、どんな臭いも消してくれるの」

三人の言葉を、一回一回頷きながら、リサは聞き入る。

「ほえ〜、すごいですね〜。レイ君たちも見たことあるんですか？」

「ああ。一回ミッションでな」

「大変だったよね〜、あれ。その森って自然遺産に登録されてるか、裸でいかなくちやならなくってさ〜」

リサはレイとミッフィを見比べ、顔を赤くして驚いた。

「えー！！ミーちゃんも！？レイ君の前で！！？」

「プレイヤーってのはそういうもんなんだよ。ただ一番大変なのはそこじゃねえ」

「そうそう」

意味深に頷くミツフィ。

「ええ！！まだ何かあるんですか！？」

そこでシェリーが口を開く。

「ふふ、実はパケルマは絶滅危惧種なの。簡単に言えば狩猟NG。だから羽なんかを取ってくる依頼がくると、武器・防具なし、道具持ち込み禁止なのよ」

「それひどいじゃないですか！！あ、大きさが小さいんですね！私てつきり・・・」

「普通の馬の6倍程度だ。子供は馬の2倍くらいだな」

「でかつ！！？そんなのから引き抜くんですか！？」

「リサちゃんリアクション大変ね」

シェリーは笑いながら続けた。

「ふふ、パケルマはね、春と秋に羽が抜け変わるの」

「犬に夏毛と冬毛ってあるだろ？あれと同じだ」

「それでね、そのとき巣に抜け落ちたものを、取ってくるっていうのがミツション」

「パケルマ自体も外敵には容赦無えし、あそこは草食動物しかいねえけど、全部攻撃的な種なんだ」

「だから結構きついなだね。薬が使えないから怪我したら断念しないよ」

「ほえ・・・まだまだ私の知らない世界はいっぱいありますね！！」

「お前が知ってる世界は、俺が言うのもあれだがかなり狭いと思うぞ」

「・・・」

そんなこんなを話しているうちに、リーヴがドアを開けた。

「お、リーヴ。・・・どうした？うかない顔して・・・」

誰が見ても分かるほど、リーヴの表情はあからさまに曇っていた。レイはそこで、リーヴが持っている依頼書に気付く。

シエリーが頼んでいたので、持っていることに不思議はないが、リーヴはその紙の束をめくっている状態で持っていた。

レイは立ち上がり、依頼書を手から抜き、その依頼を見た。

「な・・・！？おい、マジかよ・・・」

何事かと、残りも立って見に行った。

「どうしたの？レイまで驚くなんて珍しい」

そう言って、ミツフィはレイから依頼書を奪い取った。

ミツフィはこの中で一番背が低いので、自然とリサ、シエリーも見ることができた。

そして、その紙を見た三人の顔は、それぞれ違うリアクションだった。

リサは何のことかさっぱり分からないという顔。

シエリーは面白そうにクスクスと笑った。

そしてミツフィは・・・

「み・・・未開地区調査！！！！」

ミツフィはうれしそうにそう叫んで、紙を上に掲げた。

「だあああ！！だから嫌なんだよ！！こいつ！！！！」

「しかも今回は地底系なんですよ・・・。絶対危険です・・・」

「行こ行こ行こー！！！！」

レイ&リーヴとミツフィのテンションが正反対なのには理由がある。

シエリーはそのことをよく知っているが、リサは首を傾げていた。何度か彼らがこういう会話をしているのを見た覚えはあるが、まだ分かっていなかった。

「あの・・・前々から思ってたんですけど、なんなんですか？未開地区調査って？」

リサの問いに、シエリーは丁寧に教える。

「未開地区調査ってというのは、いわゆる危険で人が踏み込んでいない場所の調査よ」

「へ〜・・・あ、でもなんでレイ君やリーヴ君はあんなに嫌そうなんですか？」

「割に合わないのよ、未開地区調査って依頼は」

「そこでレイが割って入ってきた。」

「あんな、国とか街からの依頼つーのは、主に四つに分けられるんだ。知ってっか？」

「えーと・・・確か、「調査」「狩猟」「調達」それと・・・「防衛」だ!！」

リサの頭を、軽く撫でるレイ。

妹のようなリサに、レイはよくこういった「子ども扱い」をする。されている当人も嫌ではないらしい。

「その通りだ。それらの内容と報酬を簡単に説明するとだな、まず「狩猟」はその名前の通り、モンスターを色んな理由で狩ったり、捕獲する。そこで報酬金はそこそ高くて、尚且つ報酬材料も倒したモンスターに比例するから割がいい。

次に「調達」だが、これは報酬金は高くはないが、何より内容が簡単だ。危険区の植物を取ってきたり、難しくてもさつき言ってた「パケルマの羽」の調達くらいだ。報酬材料は物にもよるが、薬品とかいった消耗品が主。入手が難しい薬品なんかほしいときは「調達」依頼に限る。

そして「防衛」は、街や施設、輸送品なんかを守るって依頼だ。

これは中々に難しいが、成功したときの見返りがかなりいい。報酬金は一番多くもらえるし、報酬材料なんかも、倒したモンスターの素材はほぼまるごと。その上レアな薬品も多くもらえる。と、まあ、この三種類は内容に見合った報酬がもらえるんだ」

リサは首を大きく振りながら理解を示した。

それを確認して、レイは最後の説明に入った。

「だが、一つだけ割に合わない依頼がある。それが「調査」だ。」

その「調査」依頼っていうのは、主に未開の土地や、生態の判明してない生物の調査だ。けどこの調査依頼っつーのは、危険度は未知数。そのうえ報酬素材はしょぼいわ、金は少ねーわでマジで割に合わねえ依頼なんだよ」

「ほえー、そういう違いもあるんですねー」

そこで何かに気付いたリサは、首を傾げた。

「あれ？でも、依頼って受けるか受けないか選ばませんでしたっけ？」

「そーなんだよ。決めれるんだよ。・・・でもな」

頭を抱えるレイの頭を、今度はシェリーが撫でた。

弟のようなレイに、シェリーはよくこういった「子供扱い」をする。

されている当人はかなり嫌らしい。

「だけど、その「割に合わない依頼」を、好き好んでしたがる人もいるって話なのよ」

「好き好んでしたがる人・・・」

リサはシェリーの視線を追った。

そこには、先ほど明るい声を上げていた少女がいた。

「やったー！未・開・調・査、未・開・調・査、未・開・調・査！！」

「・・・はは、ミーちゃん・・・」

変に陽気なミツフィに、苦笑いをするリサ。

「な、何でミーちゃんは調査依頼が好きなのかな？」

「・・・なんか、「未知の調査ってロマンがあるよね！！」・・・らしい」

「・・・なにそれ」

「知らねえよ！！！！」

3・戦場への朝は胃液の味

翌日、レイの朝は突然訪れた。

腹部に強烈な衝撃が走り、息が一瞬止まる。

「・・・っ！がはっ！げほっ！！」

レイはもがきながら、腹の上に何かがあることに気が付いた。

それを探ると、指先には温かく軟らかい感触を感じ、細かいふわふわした毛が幾つか絡みつく。

「・・・おい。てめえ何やってんだよ・・・」

「えへへ、あつたかいねー、レイの布団」

レイの上には、幸せそうな笑顔のミツフィがいた。

どうやら先ほどの衝撃は、この無邪気そうな少女によるモーニング・タツクルのようだ。

そう言っつてミツフィは、レイの布団に入ってくる。

「おいお前、何やって・・・いつ!?!?」

起き上がるうとした瞬間、激痛が走る。

その隙にミツフィは、布団の中でレイの隣りに落ち着いた。

「たくっ、のしかかって来やがって・・・」

真横にあるミツフィの顔を、改めて見る。

いつもは寝坊しているこいつが、結果は寝たものの、なぜこれほど早く起きたのか。

そしてレイは、昨日のことを思い出した。

「・・・ああー、朝から鬱だ・・・」

今日は未開地区調査の当日だった。

「もおー、いつもそうやって嫌な顔して、なんで未開地区調査は嫌なの?」

その声を聞いて、布団の中から顔を出し、ミツフィは不満そうにそう言った。

しかしレイは、相変わらずダルそうな声で答える。

「全国のプレイヤーにそれを聞いても、俺の意見と違いはないだろうけど、ぶっちゃけ割りに合わねえんだよ」

「皆そうやって嫌がるけどさ、そんなに悪いものじゃないと思うけどな……」

そう言うミツフィの頭を、ポンポンと二回叩いて、レイは起き上がった。

「お前がそう言うって知ってるから、リーヴも依頼があれば受けるし、俺も付き合うんだろ」

「えへへ……分かってるよ。ありがと、レイ」

「いいよ、別に。仲間なんだし」

レイは立ち上がり、インナーの上に着ていた麻の大きな服を脱ぐ。続いてミツフィも起き上がり、そのままドアへ向かった。

「もう仕度するんでしょ？私リーヴ君起こしてくるね」

「……ああ。リーヴにお気の毒様、って伝えといてくれ」

「オッケー！」

眩しい位の笑顔を浮かべながら、ミツフィは戸を勢いよく閉めた。レイは、部屋の人型木造模型に着せられた防具を、腰から順に付けていく。

白いインナーが、着々と赤に塗り替えられていく。

そして腕に皮の手袋を付けているところで、レイは動きを止める。

「……そろそろか」

そう言うって、着替えを再開した。

それから数秒後、大きな物音と少年の断末魔（死んではない）が、猟団内に響き渡った。

「お……はよう、レイ」

「おお、リーヴ。辛そうだな……何かあったか？」

「・・・お気の毒様、だけど、何があつたか話したい気分じゃないよ」

レイを睨みながら、リーヴは猟団の外へ出た。

続いてレイも外に行くと、そこには興奮状態のミツフィと、見送りに出てくれていたリサとシェリーがいた。

中から出てきた二人を見て、ミツフィは目を輝かせる。

「待つてたよ、二人とも!!」

そう言いながら、手を広げて少女は走ってくる。

しかし二人は、反射的にミツフィのハグを避けた。

猟団の壁に顔から衝突するレイ。

「・・・なんで避けるの？鼻血でちゃったじゃん・・・」

「・・・今日の朝、自分で俺たちに植えつけたトラウマを忘れたか？」

レイは文句をたれて鼻血もたらずミツフィにそう吐き捨て、シェリーのほうへ向かった。

「じゃあ、南門から出ればいいんだな？」

「ええ、そうよ。あと一人、空いてる人がいたら誘っただけど・・・」

「別にいいよ。いたとしても、未開地区調査に付き合わせるのには申し訳ない」

申し訳なさそうな表情を浮かべるシェリーに、レイはそう言って遠慮を示した。

実際ミツフィといると、普通でも手間取る未開地区調査が、更に長くなってしまふ。

ミツフィのこういう面での自己中に、レイはほとんど困っていた。

「レイ君、上質な薬草が手に入ったから、みんなで分けて使って」

シェリーの影から現れたリサが、そう言っつやつやつとした薬草の束を、レイに渡した。

「ああ、いつも心配してくれてありがとうな」

「僕からも、ありがとう」

レイとリーヴはそう言つて、リサとシェリーに礼を言った。
しかしそんな事情も知らない興奮しつぱなしの少女は、いつの間
にか南門へ続く大通りまでいつていた。

「早く行こーよー！！目的地まで三日もあるんだからさー！！」
大きく手を振るミツフィに、レイは心底呆れる。

リーヴも、苦笑いを浮かべていた。

「なんか・・・悪いな」

「いや・・・いいですよ」

「あとで、きつく言っておくよ」

レイたちは、二人に別れを告げて、ミツフィと合流する。

そんな三人の後姿を見て、リサは思わず笑ってしまった。

「ミツフィちゃん、可愛いですよ。レイ君もリーヴ君も、お兄ち
やんみたいに優しいです」

「ええ、そうね。見ていて微笑ましいわ。あなたも、ね」

シェリーはそう言つて、リサの頭を撫でる。

「なんか楽しそうですね、未開地区調査。私もプレイヤーになりた
かったな」

「・・・そんなにいいものじゃないわよ、未開地区調査って」

少し声色が暗くなったのに、リサは思わずビクついた。

それを見て、シェリーは静かな口調で続ける。

「見送り人の顔が暗いんじゃ、あの子達に毒だから黙ってたけど・・・
」

「・・・何を・・・ですか？」

おどおどと聞くりサ。

「・・・プレイヤーの仕事の中で、一番行方不明・死亡率が高いの
は、64%で「調査」なの」

「・・・え？」

「そして「調査」の中で行方不明・死亡率92%を占めるのが、未
開地区調査なのよ」

それを聞いた瞬間、リサの顔が青ざめる。

その反応を見て、シエリーは困ったような表情を浮かべた。

「昨日、レイ君が言ってた「割に合わない」っていうのは、それも含めてなの。あなたがこうなるって分かってたから、あえて言わなかったんでしょうけど・・・」

「そんな・・・」

リサは涙を浮かべて、シエリーを見上げた。

「レイ君たち・・・生きて帰ってきますよね・・・？」

「・・・命に、絶対なんて言葉は使えないわ」

リサは一層目を潤ませる。

そんな少女に、シエリーは笑顔を見せてあげた。

「でも、今までも未開地区調査には何度も行ってたでしょ？ だったら私たちは、今まで通り祈るしかないってことよ」

「・・・分かりました」

そう言っつてリサは、目に布を押し当て、涙を拭った。

シエリーはそんな少女を微笑ましく思いながら、打って変わり険しい顔で、レイたちが去っていった方を向いた。

「待ってる人がいるんだから、ちゃんと帰ってきてなさいよ・・・」

南門を出たところには、何台もの馬車があった。

東洋の島国で、馬というモンスターに荷台車を引かせる文化があったらしい。

それを真似て、アースガルドを含めこの大陸ではこちらの原生生物、ポプリカに荷台車を引かせている。

それらも総称して、馬車と呼ばれていた。

ポプリカとは四足歩行のモンスター。

しなやかで細い外見にも関わらず、かなりの力を持ち、そして見かけ通り走るのが早い。

手足の先には一本の鋭い爪を持ち、鞭のような尾を持つ。

細く短い体毛は、さらさらとした手触り。

顔は先に行くにつれて細くなり、主食である草を丸め取ったり、水を飲むのに役立つ細長い舌を持っている。

耳の毛だけが長く、走るとひらひらとなびくのだ。

レイたちは並べられたそれらの一番端にある、二頭のポプリカがつながれた、少し小さめの馬車。

それに自分の武器と、アイテムを積み込んでいた。

一足早く作業が終わったレイは、馬車の前に回り、馬車の御者台に座っていた少女に挨拶をする。

「今日も頼むよ、よろしくな」

「・・・仕事だし。つーか、馴れ馴れしいし」

少女は布でできた、前にツバのついた帽子を深くかぶり、麻でできた長めの服を重ね着している。

首には三つの穴の開いた金属製の笛が、チェーンに付けられ下がっていた。

この笛によつて、操縦士はポプリカを操るらしい。

「お前らも頼むな、クロノコ、シロノコ」

レイはそう言つて、荷台車に縄でつながれた黒と白の二頭のポプリカを撫でた。

ポプリカはうれしそうに、鼻をクンクンと鳴らした。

「・・・この子たちが私以外に懐くなんて、最初は全然想像つかなかったし・・・」

そう言つて、少女は不服そうな顔を浮かべた。

彼女は、最年少で操縦士の資格を取った、天才操縦士のハイライト・ヴェルディ（愛称 ハイライ）。

シェリーの親族で、その縁もありレイの猟団の専属運送士になつてもらっている。

なので同じ年頃のリーヴやミツフィ、そして兄のようなレイとは、他の人間よりもほんの少し接点が多かつた。

「まあとにかく、よろしく頼むよ、ハイライ」

「やっと終わったよ。ハイラちゃん、今日もよろしくね!!」
「いつも、ありがとうございます」

ハイラは顔を真っ赤にして、笛に大量の息を吹き込んだ。
大きな音を聞き、ポプリカも興奮しだす。

「だああああ!!うるせえし!私はただ仕事こなしてるだけだし!
!早く乗らないと置いてくし!!!!」

「ちょ、ハイラ!お前これマジで置いてかれるパターンじゃん!?
!じゃあ早く乗れし!!」

その後、鮮やかに乗ったレイとリーヴに対し、遅れたミツフィは
世界初の、ポプリカに走力で勝った人間となった。

かたかたと揺れる馬車。

ゆっくりと流れる雲は、空の色とともに模様を変える。

この空を見ながら、人々は誰かに、そして何かに思いをはせるの
だ。

三人のプレイヤー、そして一人の操縦士も、空を眺めていた。
誰も踏み込んだことのない、新たな地へ思いをはせて。

そこに在るものに、期待と恐怖を抱いて。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6860q/>

プレイヤー

2011年2月6日15時55分発行